たかっぽ通信

大利根 川のフィールドミュージアム ニュースレター

発行：千葉県立中央博物館
大利根分館
大利根 川のフィールド
ミュージアム
たかっぽ通信準備号
連絡先：〒287-0816
千葉県香取市佐原ハ4500
Tel 0478-56-0101
Fax 0478-56-1456
http://www.chiba-muse.
or.jp/OTONE/
2008年10月25日発行
CHIBA

川のフィールド・ミュージアムってなぁに

千葉県教育委員会では、平成15年度「房総の山のフィールドミュージアム事業」の開始を皮切りに、各県立博物館・美術館において自然や文化に触れて学び楽しむ「千葉フィールドミュージアム事業」（以下、千葉FM事業と略称）を行ってきました。

「フィールドミュージアム」とはどういうものなのでしょう？それは、1970年代にフランスで提唱された「エコミュージアム」（生活環境博物館）の活動がもとになっています。それは「地域社会の人々の生活と、そこの自然環境、社会環境の発展過程を史的に探求し、自然・文化遺産を現地において保存し、育成し、展示することを通して当該地域社会の発展に寄与することを目的とする博物館である」という考えで、行政機関と地域の人々が一体となって考え、作り、行っていくという理念をもった博物館活動なのです。

「千葉FM事業」基本計画では、3つの博物館活動をフィールドミュージアムと定義しています。

①自然と文化に直接触れ、親しみ、学ぶ機会を提供する博物館活動。
②現場（フィールド）の自然・文化そのものを資料と考える博物館活動。
③地域の自然・文化を守り育む博物館活動。

この事業は、現場（フィールド）にある自然、文化、歴史遺産そのものを「資料」や「展示物」として考え、多くの人々が博物館学芸員とともに直接調べることによって身近な自然、文化、歴史を体験・体感できる環境作りを進め、魅力的な地域作りの手助けをすることを目的とした新たな博物館活動なのです。

千葉県立中央博物館では、大利根分館を拠点として、利根川下流の「水郷」地域を活動領域にした「川のフィールドミュージアム」事業を行うことにしました。

利根川は、関東山地最北部の大水上山を水源として関東平野を北西―南南東に分かち、野田市付近からは本県と茨城県の県境を形成しながら約320㎞にわたって流れ太平洋に注いでいます。利根川は、大地を削り豊かな恵みを与え多様な生物をはぐくむ源泉であるとともに、多くの人々の生活との深いかかわりのなかで特色ある文化を形成してきました。

大利根分館では開館より利根川の自然、歴史、文化をテーマに博物館活動を行ってきましたが、この地域における専門的分野について、さらに資料収集を行うとともに「水郷」の文化遺産に触れて、学び、楽しむフィールドミュージアム事業を行うことにしました。

初年度は、土を盛って洪水から人や食糧を守った水防施設「水塚（みづか）」を地域の方々と共に調査を行い、水塚とはどのようなものなのか体感・体験して、新たな魅力を見つけたいと思います。また、調査活動の様子や成果をこの「たかっぽ通信」を通じて情報発信していく予定です。

▲水塚調査の対象となる「十六島地区」の位置

「水塚」ってなぁに

▲香取市十六島地区の水塚

人の背丈ほどの盛り土に二階屋の建物が見えます。一階は米などの蔵として、二階は洪水の際の仮住まいとして使われました。　大利根分館館蔵写真

大きな河川の中・下流域では、水田耕作の便利のため人々は河川近くの微高地や自然堤防の上に集落を作りました。しかし、そのような場所は洪水の常襲地帯でもありました。

人々は土を盛って塚を造り洪水の際の避難場所としました。また、水が引くまでの当座のすまいとして塚の上に建物を建てました。

このような塚や塚の上の建物を「水屋（みずや）」とか「水塚（みづか）」などと呼びます。

九州では筑後川の下流域（水屋と呼ぶ）、関西では淀川の中流域（段蔵と呼ぶ）、中部地方では木曽川などの下流域である輪中地帯（水屋と呼ぶ）、信濃川の下流域（水倉と呼ぶ）が知られています。

関東地方でも利根川、荒川の中・下流域に広く認められます。荒川流域では埼玉県熊谷市から東京都北区まで、利根川流域では群馬県南端の邑楽郡、対岸の栃木県足利市を上限として香取市付近にいたる広い地域に分布しています。

中でも利根川本流に渡良瀬川が合流する一帯は特に多く、群馬県板倉町では、昭和35年当時492棟もの水塚が確認されました。千葉県内では印旛郡栄町に多く、昭和59年の調査時点で72棟が現存していました。

では、利根川流域の水塚について代表的な板倉町を例にもう少し詳しく見てみましょう。

まず、塚の高さですが、低いもので1m程度、高いもので4m近くと地区により大きな差がありましたが、どの水塚も標高は堤防と同じ18mであることがわかりました。

塚の位置は、母屋から見てほとんどの場合北から西方向に隣接しています。

建物は二階建てで木造がほとんどですが、土蔵や石蔵もあります。規模は間口3間×奥行2間が普通で、奥行側に梁を差し出して味噌部屋を設けています。一階は土間で、非常時に備えて米、麦などが蓄えられました。階段を上がった二階は板敷きで、水害時には生活用具や仏壇をここに引き上げて生活しました。大きな水害時には水が引かず、一か月以上もここで暮らしたそうです。

水塚の築造は17世紀頃から始まったようですが、特に浅間山の噴火以降、利根川の川床が上昇して水害が激しくなってから多くなり、昭和22年の大洪水後にも造られました。

【主な参考文献】板倉町教育委員会
2004　水防建築「水塚」調査報告書

▲水塚概念図

「水塚」は貴重な文化遺産

私たちは大利根分館を基地とした川のフィールドミュージアムのテーマとして、香取市十六島地区（注）の水塚を選ぼうと考えました。

この地域も他の利根川流域と同じく、水害の常襲地帯でしたが、昭和40年代から50年代に行われた大規模な土地改良事業によって水郷地帯を象徴するエンマ（水路）はなくなり、サッパ舟も不要になりました。替わって道路が整備され、自動車が普及しました。また、このころから各戸で家の建替えが盛んに行われたようで、その際に多くの水塚がなくなってしまったようです。

ところが残念なことに、当時から水塚の調査は行われず、この地区に何棟あったのか、どのような特徴があったのかなどの記録はまったく残っていないのです。

水害の心配がほとんどなくなった今、水塚はこの地区がかつて水郷地帯であったことを示す証拠のひとつであり、先人たちが行った水害対策の苦労のあかしでもあります。そうした意味で水塚は十六島地区の貴重な文化遺産といえるでしょう。

水塚調査はこの文化遺産がどのようなものであったかを調べる意義のある作業であると思います。

▲屋敷内の水塚の位置
（佐藤ほか「荒川流域における水塚」より）

用語解説

【十六島地区】（注）

十六島地区とは主に利根川北岸の香取市北部から稲敷市の旧東町東部一帯の地域を指します。

この地域はもともと香取海と言われた内海でしたが、川砂が次第に堆積して低湿地帯になり、江戸時代初めころから新田開発が始まりました。これらの新田村が十六か村であったことから十六島新田と呼ばれました。香取市域の行政区分では新島地区、北佐原地区に当たります。

▲十六島空中写真
（国土地理院発行　昭和22年撮影）

▼十六島概略図

水神社

十六島地区がかつて水害の常襲地帯であった証拠の一つに「水神社」があります。

地図上で確認すると長島・笄島・八筋川・境島・加藤洲・中洲・附洲新田・砂場・津宮新田・篠原新田・石納で見つかりました。

水神社に祭られているのは、水分神（みくまりのかみ）や竜神とされています。どちらも水をつかさどる神です。水害を防ぎ、稲の豊作を祈るために建立されたものでしょう。しかし、これらの水神社は水害によってたびたび壊れ、そのたびに土地の人々によって再建されたと伝えられています。

水神社は人々が自然の猛威に対抗する心のより所だったのでしょう。

水塚調査とあわせて、こうした水害にかかわる信仰についても調べてゆきたいと思います。

【主な参考文献】
千葉県香取郡佐原町 1931
「佐原町史」

▲中州地区の水神社

十六島地区《水塚調査隊》に参加しよう

では、実際に水塚調査はどのように行うか、説明しましょう。

10月26日（日）・11月30日（日）の2回にわたって十六島地区の現地を博物館職員と歩いて水塚を探し、規模を測ったり、建物の構造や特徴を調べて、調査カードに記載するほか、写真撮影も行います。また、持主の方や地元の方々から、本来水塚がどれだけあったのか、どのように使われていたのか、などの聞き取りを行います。そして、12月21日（日）の三回目は、二日間の野外調査でわかった内容、例えば水塚の位置を地図に落して分布の傾向をみたり、水塚の特徴を発見したりして調査の成果をまとめます。

なお、代表的な水塚を業者に測量してもらい、正確な測量図面も作成します。

皆さん水郷地帯の貴重な文化遺産である水塚を「水塚調査隊」の隊員になって調査してみませんか。

たかっぽ

このニュースレターの名前を「たかっぽ通信」と名付けました。たかっぽとは竹筒のことです。利根川下流域で使われたうなぎを捕る道具で、真竹の節を抜いて2～3本ずつしばり、漁場に数多く沈めて仕掛けました。素朴な漁具ですが、利根川下流域を対象とした川のフィールドミュージアムのシンボルとして、通信紙名に選びました。

▲たかっぽ

●編集後記

この博物館活動を始めるにあたって、「フィールドミュージアム」とか、「水塚」とかいっても一般の人はよくわからないよねというのが学芸員の印象でした。そこで理解の助けになればとこのニュースレター準備号を作成しました。紙面はいかがだったでしょうか？

フィールドミュージアムもまだまだ手探りの状況です。「共に活動する」をテーマに興味のある方の参加・ご意見をお待ちしています。そして、地元の皆さん、どうか私どもの調査の趣旨をご理解いただき、ご協力をよろしくお願いいたします。

（西・や）